

施主として建築家に求む

榊田喜四夫

「建築家としての責任」

「建築家としての責任」

かつて一世を風靡したT型フォードは、わが国でも大変人気があったし、20年近くも同じモデルでドライバーに親しまれた。これに対抗してゼネラル・モーターズがデザインを導入することにより、T型モデルを打ち破ったという話がある。デザインのみが先行し、メーカーも実際に乗る人に与える快適さ、自動車の安全性、経済性よりも、売れるためのデザインを優先し、自動車のモノ離れをもたらしたわけである。

同じことが建築の場合にもいえるのではないか。われわれが家を建てる時、周囲の環境、自分の職業、家族構成、子供の年令、使用目的に応じた部屋の間とり等を条件として注文する。しかしこうした条件が未来永劫に変わらないわけではない。時の経過とともにライフステージは変わるし、それに対する使い勝手の問題も出てくる。したがって時が経つにつれ、どうも自分の家が生活の場としてしっくりしないにか違和感を感じるのである。

建築家が家を設計する時に、自分が住んだ経験がないものだから、施主の要求は一応聞いてはみるものの、あまり確信が持てずに、デスクワークだけの設計で家を建てるから、こういう結果になるのである。こうした問題はなにも住宅に限ったことではなく、一般の建築についてもいえるのではないだろうか。

私が施主として京都信用金庫が新しい店舗を建てる時にどういうプロセスを踏まえているか参考まで述べてみたい。

従来の銀行の建物は、一般にギリシャ様式の重厚な石造りで、それが銀行の権威と威厳を象徴していた。歴史的にみると、銀行の発展過程は、いずれもその国の世界制覇の過程と軌を一

にしていた。金融機関がただ単に国民経済的な役割のみではなく、世界制覇の国家的役割を担っており、そのために国家的権威と威厳を象徴するものが求められていたのである。そしてそれを追求し、可能にしたのが建築であった。そこでは銀行の建物が、社会から孤立した、近寄りがたい存在としての孤高を保っていた。実際にそこで生活する人の居住性、使い勝手の問題や、そこを利用する人々の利便性、周囲の建物との調和など考慮されずに建てられたのである。

しかし今日の新しい社会状況のもとでは、金融機関のもつ社会的機能は大きく変わってきたし、建物のあり方も当然変わらなければならないはずである。

当金庫の一連の店舗計画を進めるにあたっては、空間計画というプロジェクトチームを組み、店舗設計にあたっている。先ず金融機関としての社会的機能をスタディし、そこから店舗の置かれている地域特性、景観の問題、空間スペースと色彩、サインの問題など、さまざまな分野でのスタディがなされる。例えば、空間スペースの問題では、店舗を大きく3つの空間に分けて考える。第1は、職員と顧客がさまざまな形で接するバンキングホール。第2は、主として、外部の人が利用できる共有部分としてのコミュニティホール。第3は、職員が利用する空間としての食堂、休憩室、倉庫等。当初はこうした使用目的と店舗機能に応じた分け方をするが、サービス業務の内容や社会的環境の変化に応じて、人間と空間の関係は柔軟になるのである。

食堂を例にとれば、一日のうちで食堂が利用されるのは、たかだか2時間程度である。食事時間以外の利用の仕方はないか。そこから、コミュニティホールを利用する人々のサロンとして、また子供図書コーナーとして開放することを考え、道具に変化をつけることによって、家庭的な雰囲気を出し、これを一般の人々に開放したのである。

こうした考えは、決して最初の設計図からは生まれてこないのである。そこで生活し、実際に使ってみて、初めて経験されることである。こうしたフィールドでの実験の結果が次の店舗にフィードバックされ、新しい店舗は、必ず新しいものを生み出すように試みられるのである。

現在空間計画にもとづく新様式の店舗は20店舗近くになるが、こうしたフィールドワークにより集積されたデータは貴重なものであり、他の

金融機関にその例をみないものではないかと思う。

また建物の構造や色彩も、周囲の環境と調和し、景観を損わないように配慮されている。修学院支店は、近くに修学院離宮、詩仙堂などの史跡が数多くある閑静な住宅地で、京都の中でも伝統的な都市の雰囲気が多分に残っている地域にある。そのため美しい町並みに対する配慮から、建物は低く目立たぬようにし、コミュニティホールも地下に置くなど、緑の環境に溶け込ませ、生活空間の実用性と外観の美しさをともに満足させるように工夫されている。

こうした計画は、建物を造る前に、地域のフィールド調査から始まり、多くの実験とスタディを積み重ねた結果、初めて可能であって、デスクスタディによる設計図だけで建物を造り、それが完成されたものとする時代は終わったのではないだろうか。

今日わが国では、年間150万戸の住宅が建てられているが、建築家が実際に自分で生活の体験をもち、それを具体化する実験にもとづいて建てられた住宅が、その内いくつあるのだろうか。

手元にあるデータによると、51年時点で一級建築士が10万3千人おり、毎年約1万人の新しい一級建築士が建築家として生まれてきている。一方、一級建築士の登録事務所は3万強である。この数字で判断する限り、一級建築士の2/3はペーパードライバーと同じで、その数はさらに増えることが予想される。こうした一級建築士が、はたして本当の意味での建築家として、独立した主張をもった仕事ができるのであろうか。今日の建築家が単なる建築技術の切り売りではなく、人間社会の質的問題に深い係り合いをもち、生活文化を創造する人として、その時代の文化をリードする自負と使命感をもって建物を造ってほしいと思う。（京都信用金庫理事長）